

# 四国はひとつ

国土交通省 四国地方整備局

道路部道路調査官 和田 忠幸



四国高松に勤務となって1年以上が過ぎました。瀬戸内は普通だった懐かしい所です。蒸しはしますが街の大きさが適度で生活のすぐ横には豊かな自然があり、山間地や島や珊瑚礁にも近く「日本が誇れる風土ってこんなんだよなあ」と感じることができる空間が異常にコンパクトに詰まっています。

## ■「伊予の二名島に四つの面」と「へんろ道」

「古事記」の「国生み伝説」では、淡路島の次に生まれた「伊予の二名島（四国）」には「面」が4あり、2人の男性（香川、高知）と2人の女性（徳島、愛媛）の名が付けられていて4人の異なる性格が示されています。

また、「思いがけないお金が手に入ったら何をやる」という、四国では誰も否定しない有名な小咄があります。「香川の人はそのま貯金。徳島の人投資で何倍にも増やす。愛媛の人はあれこれ買物をして全部使ってしまう。そして高知の人は喜び勇んで飲みに行って足りなくなって余分に払う」というものです。

表題の「四国はひとつ」は、近頃の挨拶で頻りに聞きますが「各県バラバラ」というのが現実です。この言葉が皆の耳に優しい理由は、本四架橋開通時の観光戦略の失敗からの脱却、「8の字」高速幹線道路ネット整備、渇水と洪水に毎年怯えざるを得ない宿命…これらの課題に対して常に前向きなスタンスを打ち出さなければならぬ中で、その解決策を「おへんろ」「お接待」風土を活かしひとつとなしておけば、誰も傷つかず誰もNOと言わないで平

和な今のバランスを確保できるからでしょう。

四国の多くの方が「四国内の他県には全く興味を持っていないし観光に行こうとも思わない」と言うのは驚きです。愛媛は広島との、香川は岡山との、徳島は近畿との結びつきを求め、高知は近畿以東の都市を目指しています。桂浜の龍馬像はアメリカを見つめているとか？「県間の交流は今後そんなに増えないだろう」との悲観論は常識になりつつあります。

一方で、札幌市のような突出した巨大都市が存在しないものの5~40万人程度の都市がバランス良く配置されていて、中山間地から都市機能に概ね90分で到達できることは、日本の中でも珍しい恵まれた条件です。四国はいわゆる消滅集落が、全国で一番多いのですが、まだまだ生きながらえている理由はコンパクトさと絶妙なバランスにあるのでしょうか。

また、四国はボランティアサポートの団体数が全国で一番多く、特に中山間地では住民が委託されて道路の維持管理をしているなどコミュニティの結束力や「公の心」が大変強いです。これらを活かして社会コストを低減し、マルチハビテーションなどによって夫婦はもとより年老いた親や子供にとっても豊かで安心な暮らしを実現し、恵みと安全を生み出してくれる自然をコミュニティで効率的に守る。加えて、公的感覚が強い賢い住民を中心に合理的な都市環境づくりに積極的に挑戦する…そんな概念が仮称で「コンパクトリージョン」？としそうです。

街の外に就職している若者は、親・親族から正月と盆に帰らなくて良いと言われていますが、春秋の年2回の祭りで御輿を担がないと即勘当とのこと。格好良く、誇りを持って生きていくために人生に不

可欠なものである祭りはコミュニティの活力です。

お祭りとは次元がちがう誇りとされているのが、世界遺産に登録申請するだけで価値があるとされ、千年以上かけて醸成した風土であるスタンプラリー 古代版「おへんろ」です。

四国といえば瀬戸内海の渦潮や宇和海の夕日など海が見える風景がきれいというイメージでしょうが「海の近くを走っても、山ばかりしか見えない」ときつとがっかりするでしょう。海からすぐ険しい山がせまり平地は狭く洪水が頻発、食料を求めて石積み の段々畑が天まで届き、山中腹に開けた地滑地にまで人が住んでいます。つい数十年前の食べることに一生懸命であった日本人の姿を垣間見ているようです。地質も脆く台風の常襲地であることから、地方部は本当は非常に住みにくいです。

そんな人智を超えた大自然の前ではただただ祈るしかないというのが根本的な日本人の哲学であり、助け合いの心「お接待」が育まれたのだそうです。おへんろを綿々と引き継ぐことが、四国全体が真に共感できて、「四国はひとつ」を実感できる唯一の誇りと大義であるということだけは、どうやら間違いない。

## ■ 四国の道路の現状と組織体制

四国の特徴を表す指標をざっと次に並べます。

- 面積5%、人口3%強、総生産3%弱。
- 災害発生の可能性がある急傾斜地面積は8割。全国平均の1.6倍。人口の半数以上が居住中。
- 高知県等南部は連続雨量2,500mm以上の豪雨地帯。瀬戸内は北海道並みの小雨で湯水が多発。
- 各県財政力指数は高知47位、徳島33位、愛媛31位、香川24位（北海道25位）。
- 延べ宿泊旅行者は徳島45位、高知40位、香川39位、愛媛33位（北海道2位）。
- 来訪意向は徳島42位、愛媛・香川37位、高知30位（北海道1位）。
- 道路延長は、高速自動車国道437km、直轄国道1,300km、補助国道1,900km、県道8,400km、市町村道44,100km。
- 人口当たり交通事故死者数ワーストは香川1位、徳島8位、高知13位、愛媛16位。



宇和島市：いわじま牛鬼（うしおに）まつりと沈下橋

高速道路は4つの県都をエックス字で結んでいますが、Xの端部を定時性の高い道路で結び8の字にするのが夢でありキャッチコピーです。直轄国道は四国の海岸線を一周し、その中に高松と高知、松山と高知を結ぶ2本ラインが険しい山脈を越えます。都市がバランスよく位置していることから海岸線の直轄国道の交通量はどこも多く、市街部は通常混んでいて都市部では朝夕に著しい渋滞となります。特に直轄国道は高速道路へのアクセス道路でもありますので急速施工による交差点の立体化及びバイパス整備を重点的に行っています。地方部では、愛媛県南部で交通量は概ね8,000台/日以上であり、最も少ない高知の最東端部でも5,000台/日です。

事前通行規制区間が占める割合は、直轄国道で1割強と北海道の2倍、県道以上では2割強で北海道の4倍です。規制基準は250mm以上と高めですがよく止まります。防災対策により規制区間延長を減らして行くというのが本来ですが、地積調査が遅れている四国の中でも中山間地はほとんど調査が実施されていないことなどから事業には相当の時間を必要としています。このため、1週間規模の通行止めを必要とする場合には高松と高知間で国道に並行する高速道を速やかに無料供用できるようにするなど既存ストックの有効活用案を常に検討しています。

県道以上の改良率は、北海道が95%に対して、徳島49%（全国1位）、高知51%（同3位）、愛媛57%（同5位）とすれちがえない幹線道路が多いのが特徴で、補助国道では1.5車線整備やすれちがい補助システムなどによって効果的かつ効率的な対応をすべく知

恵を絞っています。ナビを信じると狭い1車線に迷い込みますのでご注意ください。自家用車の基本は四国では軽です。

平成19年度の四国の公共事業の計画工事費は、約6千7百億円で平成11年度の6割減です（うち道路約2千5百億円）。国は1割減ですが、公団等は8割減、県は7割減、市町村は6割減と大きく減少しています。四国地方整備局の事業費は約3千6百億円（うち直轄道路は約1千百億円、補助・交付金含みで約1千8百億円）です。

これらの状況に対して、直轄の事務所の数は香川と徳島に1、愛媛に2、高知に3の合計7事務所で管理担当出張所は15です。

四国地方整備局の道路技術者数は380名程度と少ないですが、「入札契約品質管理のシステム改善のチャレンジャーたれ」というトップミッションに応えるべく、常に業務の重点化、効率化、簡素化の工夫にも力を注ぎつつ、「今何をすべきか」企画部とともに会議の都度見直しています。先日は全国初で加算方式の橋梁のDB発注を実施したところで、ワンデーレスポンスプロジェクトなどの各種取組にチャレンジしています。「現場を待たせない！」というワンデーレスポンスプロジェクトでは平成18年度に高知県で5件のテスト工事を行い、1件は途中断念しましたが、4件の工事の結果は工期20%短縮、利益率7%アップ、工事評点79.3点という驚異的な成果となったことが技術研究発表会で高知県が報告し、論文表彰されました。

道路調査官というポストは、地方整備局では道路部長（北海道開発局では、道路計画課長+道路建設課長+道路維持課長+地方整備課長？）の補佐代理が仕事ですが、各地方整備局の道路部長によって仕事内容は大きく異なるようです。いまは、道路部長に挙がる件は、災害事故等の緊急事項を除いて、先に全て調査官を通します（毒味）ので、道路部以外の地整内の職員とも話す機会が多いです。むろん、局長始め権限が非常に強い事務所長とは頻りに密なコミュニケーションをとっています。イベント等でほとんど休日無、飲み会含めメチャ忙しいですが、全体の動きとの一体感と充実感の中で、周りの方に感謝しながら過ごしています。北海道関係の人が周りに多くなったことには皆驚いています。



神山町：お遍路道と桜



今治市：来島大橋と自転車道

北海道はまだまだ行ける！と本州に埋没しているような四国では強く感じます。

四国4県は財政が厳しく直轄負担金にさえ困っています。全国で全県の財政がここまで悪いのは四国だけ「効果的かつ効率的整備」が決まり文句です。

また、観光では「四国に来たい」と思う人が少ない上四国内他県相互の交流は少ない。自県内でさえよく知らない人も多く、結局地域の観光基盤がパワーを蓄えることはない。だから、「一度は行って味わなければと思わせるオンリー・ワンの魅力を磨くなんてなかなかできません。それでものんびりして今の状態に安住しているのは、死んでしまう！という危機感をこれまで感じたことが無いから」という愚痴を聞きます。事故が多い理由は慣習にあり。

遠く憧れのただっぴろ〜い大地は異次元空間のようで素敵なのだそうです。マジで言われると本当に嬉しいものです。

「豊かで安全安心で活力ある大地」を明るく楽しく自信と誇りを持って創っていただけますこと心よりご祈念申し上げます。